

特集 東日本大震災と図書館

復興支援から「学びの場」へ

—福島県新地町図書館と大学生の関わり—

鳥居 高*

はじめに

「あの震災」から早くも5年の時間が流れる。時の流れに対する感覚は年齢と共に変わるため、ある程度の年齢に達すると、時間の経過がとても早く感じられる（20年が「あっ」という間に過ぎてしまう感覚になってしまった！）。しかし、若い世代や次代を担う児童・生徒たちにとっては5年という時間はとても長い時間であろう。そのことはこの4年間毎年夏に訪問する新地町（福島県相馬郡）の子供たちの成長で実感する。東日本大震災後初めて出会った新地町の小学生が中学生としての3年間を経て、既に高校に入り、いまや大学進学を視野にいれるまでに成長している。

本報告は本学の新地町での支援活動をまず概観し、支援活動の中で1つの柱になっている新地町図書館との関わり・活動内容を取り上げ、「図書館や司書課程履修学生が震災復興支援とどのように関わるか」の1つのケースを提示することを目的としている。

*とりい・たかし／明治大学 商学部教授／震災復興支援センター副センター長

「明大 week in 新地」から司書課程履修学生の活動へ

明治大学は東日本大震災の被災地への復興支援を目的として、学長（納谷廣美学長：当時）の下に「震災復興支援センター」を設置し、この5年にさまざまな支援活動を行ってきた。特に「震災復興に関する協定書」を3つの地方自治体との間で締結し、震災復興支援センターを中心に復興に向けた支援活動を展開している。具体的にはまず、福島県相馬郡新地町（協定締結：2012年1月）、次に岩手県大船渡市（同：2012年4月）、そして最後に福宮賢一現学長の下で宮城県気仙沼市（同：2012年5月）と協定書が結ばれた。それぞれの自治体での支援活動は被災地の状況や関わりのプロセス、そして支援主体から一様ではない。

本稿で取り上げる新地町での活動の特徴は、教職員・学生はもとより、体育会運動部、サークル、複数の学部ゼミなどさまざまな「単位」が支援活動を展開していることであろう。これらの多様な活動の展開を受けて、町役場からの助言を受けて、2013年からは町で行われる夏祭り「やるしかねえべ祭り」（主催 新地町商工会）を皮切りとした約1週間を「明大 week in 新地」と名付け、集中的に支援活動を行うことにした（詳細は震災復興支援センター HP を参照）。

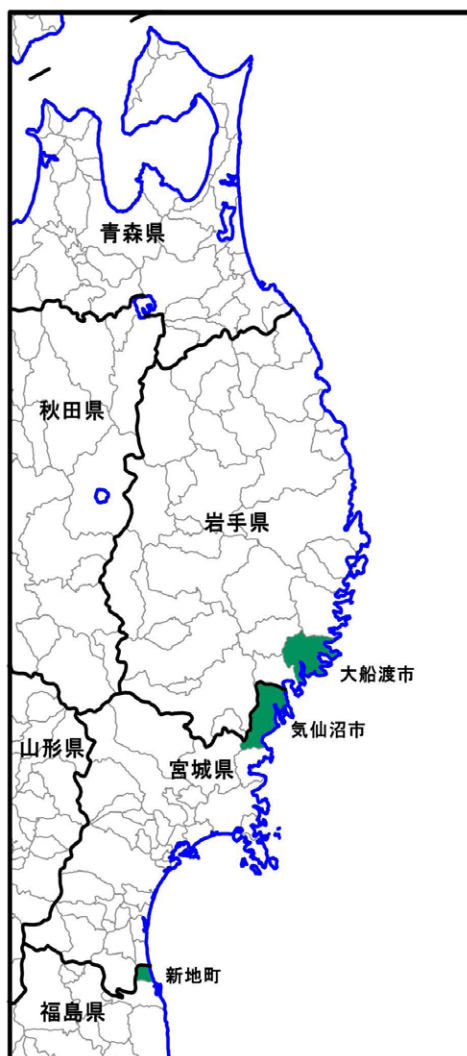
支援活動の柱の1つとなってきたのが学部間共通総合講座1つとして2012年度から実施した『東日本大震災復興支援ボランティア活動講座』（コーディネータとして学生部長の松橋文学部教授、教務部から鳥居が共管）履修学生による学習支援活動を中心とした活動である。その学習支援活動から新地町図書館との関わりが生まれ、2014年度からは本学の司書課程履修学生が新地町図書館で「支援活動」を実施している。

新地町との協定

新地町は次頁の地図に示したとおり、福島県の最北端に位置する。面積46.35km²、人口は本学の1学年（10学部）の学部生総数とほぼ同規模の約8,000名あまりの小規模な町である。町内には火力発電所やさまざまな機械工業の事業所もあるものの、農業、そして漁業を経済活動の中心にしてお

り、夏には海水浴・サーフィンや海釣りを楽しむ観光客でにぎわう町であった。いわば、町の経済活動の軸足の片方を「太平洋」においていたと言える。したがって、東日本大震災では、太平洋沿岸地域を中心にして死者・行方不明者が110名にのぼり、町の農地の4割にあたる420haが津波の被害を受けた。特に町を東西にわける国道6号の東側、すなわち太平洋に面した地域が津波の被害を受け、町はこの国道を挟んで、ほぼ全滅した地域と津波の被害を免れた内陸地域に大きく分かれている。

同町役場と明治大学は2012年1月26日、「東日本大震災以後の地域復興に関わる諸課題の解決や施策の実施について協働するため、協定書を締結した。そのきっかけは新地町町長（現・加藤憲郎町長）が本学にて開催された震災復興に関する学会に参加したことをきっかけにしている」（震災復興支援センターパンフレットより2015年度）。



(出所) 明治大学震災復興支援センター作成

児童を「待つ」学習支援から児童を「訪ねる」学習支援へ

協定締結後は 2012 年度の学部間共通総合講座の履修学生による「ボランティア活動」が本格的な活動の端緒となった¹。具体的には、同講座履修学生 14 名が 2012 年 8 月 9 日から 14 日に掛けて 2 班に分かれて活動を行った。この際に学習支援活動の「場」として新地町図書館内の 1 室（視聴覚室）をお借りして、児童を「待つ」形で学習支援活動が開始された。

翌 2013 年度にも同じ総合講座の学生が同じ形態で「明大生のお兄さん、お姉さんと勉強しよう」と銘打って学習支援活動を行った。併せて、学習支援が行われている図書館の業務の一部をお手伝いするという形で、図書館との関わりが生まれてきた。

活動形態が変わったのは、2014 年度からである。これまでは児童を「待つ」形であったが、新地町教育委員会の方からのアドバイスを受けて学習支援を待つ 3 つの小学校²に児童を「訪ねる」形に変更するにいたった。この変更の経過途中で司書課程学生が図書館での支援活動に関わるようになった。



「待つ」学習支援：2012 年度 新地町図書館での学習支援活動の様子

¹この年はほかに、理工学部教員有志による科学教室などが開催された。本稿の目的は、新地町での復興支援活動の記録を残すことではないので、詳細な説明は省く。

²新地町は新地、駒ヶ嶺、福田の大きく 3 つの地区に分かれ、それぞれの地区に小学校が 1 校ずつ設置されている。また中学校は同町に 1 校（尚英中学校）のみある。



「訪ねる」学習支援へ：2014年度 駒ヶ嶺小学校にて



「訪ねる」学習支援でも活用された図書館(2014年度新地小学校図書館)

2012年度のスタート、13年度の改善を受け、14年度から午前中は3つの小学校での学習支援活動、午後は同じく3地区に開設されている児童クラブにおいて、主に小学生と運動不足解消のための「遊び」という現在のパターンへと支援活動の内容が落ち着いた。

新地町図書館との3つの関わり

2012年以降の新地町図書館と本学の復興支援活動の関わりは大きく3つに整理することができる。すなわち、(1) 学習支援活動の場としての図書館、(2) 復興支援活動の場としての図書館。そして、最後は2014年度から「震災復興支援・地域活性化の場」としての図書館であり、本学学生にとって「実習体験の場」としての図書館である。また、その関わりも当初は学部間共通総合講座の履修学生から司書課程履修学生へと、その主体が変化しつつある。

学習支援の場としての「図書館」

支援活動を2012年度に本格的に始動していくにあたって、新地町との事前折衝や支援要望の打ち合わせの中で、強く出されたのが「学習支援」と「児童とのふれあい」であった。学習支援に関して言えば、他の震災地と同じように、東日本大震災ならびに福島原発事故によって、「仮設住宅という限られた居住空間での生活を余儀なくされている児童にとって、狭い住宅の中では、落ち着いて勉強できる環境になく、学力低下につながる」（新地町役場との事前折衝メモより）とのことから、明治大学学生による学習支援への要望が出された。

「児童のふれあい」に関しては、町の要望をストレートに表現すれば「大学生のお兄さん、お姉さんと体を動かして遊ぶ」となる。これには説明を要するであろう。「体を動かすことの必要性」に関しては、仮設住宅が町の運動施設、公共的な広場に建設されたことによって、児童が屋外で遊ぶスペースが大幅に減ったことが理由としてまずあげられる。また、福島第2原子力発電所の事故に伴い、除染作業や運動場の土の入れ替え作業などで、やはり屋外で遊ぶ機会が減った。このために、活動当初から屋内の児童館などで、体を動かすことへの参加が求められていた。

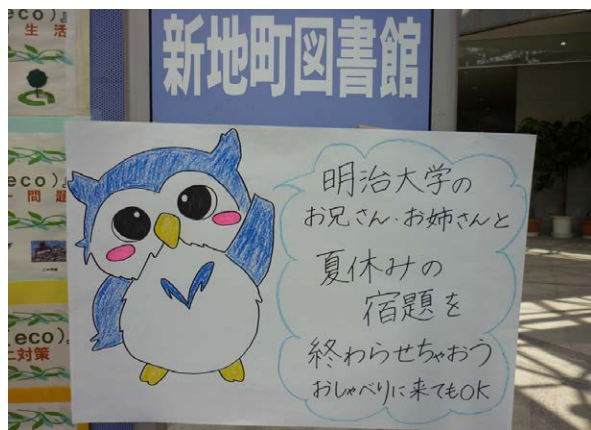
学習支援を行う場として町役場に隣接する町の図書館の1室で学習支援を行うことにした。具体的な学習支援では、確かに連日10名以上の小中学生が集まった。内容としては、夏休みの自由研究や九九の計算など、子ど

もたちが必要としている事柄に1対1で「一緒に」学ぶことであった。最初は恥ずかしがっていた子どもたちも次第に学生に打ち解け、本当の兄弟・姉妹のように親しくなっていくという効果も見られた。しかしながら、参加者の広がり大きな課題となった。

そこで、翌2013年度（8月5日から8月9日 2班に分けて実施、前年同様に松橋文学教授〔学生部長〕と鳥居が引率）の図書館における学習支援活動では、学習だけでなく「児童が集まる工夫」を試みた。例えば、写真の通り手作りディスプレイや広報活動、また学習のみならず、バルーンアート作りの実施やビンゴ大会などである。



視聴覚室前の案内(2013年度)



図書館入り口に掲示された学生手製のポスター



2013年度 新地町図書館での学習支援活動



視聴覚室におけるバルーンアート作り

この2年間の学習支援活動でわかってきたことは2点である。第1点が児童を「待って」いるために、支援を必要とする対象がばらばらで予測がつかないことである。九九などの算数に始まり、漢字の書き取り、俳句作り等々学習内容はさまざまであった。

第2点が児童にどのように集まってもらうか、という課題であった。この課題について、1年目の経験を踏まえ、「広報」や「周知不足」に原因があると考えられたために、2年目の2013年度は前述したように広報や工夫を行った。しかし、この対処では限界があると同時に、集客活動を必要とする支援活動に根本的な疑問が参加学生からも寄せられた。最終的に、2014年度の実施に際し、町からの提案で小学校へ児童を「訪ねる」という形にするという方針転換が図られた。

支援活動の計画から実施までのプロセス

支援活動を展開するにあたって、一番大きく、かつ一番基礎的な課題が「ニーズのくみ上げ」であり、ニーズとシーズのマッチングであったことは言うまでもない。明治大学という組織が持っている優位性から行いうる活動と新地町という被災地が必要とするニーズをどのように結びつけるか、

ということが重要になってくる。その際には、関係者の相互理解や入念なコミュニケーションが必要なことは言うまでもない。ちなみに大学がこうした震災などへの支援活動を行う優位性は、研究者という専門家集団を有していることに加え、学生の存在である。本学の場合、毎年約8,000人の学部新生が入学するわけであるから、考え方によってはボランティア「予備軍」が毎年8,000人組織的に加わることになる。

新地町での年間活動はおおむね次の4段階で展開された。

1. 事前折衝

：前年度2月末から3月にかけて、翌年度の明治大学側から計画概要の説明と新地町役場側の受け入れの確認。また次年度の町からの要望の確認。基本的に両機関の担当者によるFace to Faceによる事前折衝を行った後は、電子メールもしくは電話で双方の関係者が詳細を詰めていった。

2. 事前研修と受け入れ準備の確認

：当該年度の6月に事前研修を実施した。主な参加者は8月にボランティア活動を行う学生（学部間共通総合講座、後には司書課程履修学生なども参加）が新地町の被災地や活動場所・施設の状況、また滞在中の生活環境（宿泊施設、食事関係）を視察³。また、6月に東京YWCAと共催する「風化を防ぐフォーラム」にも参加し、事前の情報を得た。

3. ボランティア活動の実施

：当該年度の8月の第1週に実施。

4. 振り返り

：9月～10月：活動レポートの作成あるいは振り返りの会の開催。

これら1から4のプロセスの中で、活動への参加動機を文章化し、参加学生に確認させること、6月の事前研修で実際の活動地を認識させること、そして活動後は活動前と今を振りかえってもらうことなどを行った。

³2015年より新地町には「新地町明治大学ボランティア活動拠点」が設置された。これは仮設住宅3住戸を町から提供していただき実現した。

震災復興支援活動の場としての「図書館」

ニーズとシーズのマッチングのプロセスで生まれたのが、2014 年度から始まった司書課程履修学生によるボランティア活動である。それ以前においても図書館での学習支援活動と共に閉架図書の整理、開架図書の整理、除籍本の整理など、図書館において補助的な作業を行ってきていた。



図書の除籍作業 (2013 年度)

しかし、2014 年度の実施にあたり前述した事前折衝の段階で、2013 年度までの補助活動に加え、図書館側からの活動内容候補に「新刊図書の書誌情報入力」があったことから、専門知識を必要とするだけでなく、司書課程履修学生にとっての実践の場と考え、震災復興支援センターから担当の先生方に協力依頼（司書課程での説明会の実施など）を行い、実現に至った。

震災復興支援・地域活性化の場であり「実習」の場としての図書館

司書課程履修学生からの参加者は 2014 年度には 5 名にとどまったが、2015 年度には 14 名という予想を上回った学生の参加があった。ここでは、

2015年度の活動内容を中心に、また参加学生の実際の声进行引用しながら、活動内容を紹介してみたい。

図書館での主な活動内容は、

1. 町内小中学校、公民館・福祉施設へ配本する図書の選書
：町の図書館の本を定期的にこれらの施設に貸し出すことから、その選書作業を図書館ボランティア・スタッフと共にに行い、実際の図書の貸出作業に従事。
2. カウンター・フロアワーク
：日常的には「利用する側」に立つ大学生が、カウンターの中に入り、貸出業務や利用本の管理作業などを行う。
3. 「明大生のおすすめの図書」のコーナー作成
：6月の事前視察に参加した学生の発案により、「明大生のすすめる本のコーナーをつくりたい」との要望が実現された。

また、このほかに図書館長から東日本大震災の状況に関する講義を受けたり、現在の被災地の見学など震災に関する理解を含めるプログラムが図書館から提供された他、町民の方との交流の場が設けられた。

それぞれの業務、1つ1つが参加学生にとって実務を経験し、貴重な経験になったことを事後レポートの随所に見られた。ここではその代表的な感想をいくつかあげておこう。

- ・書誌事項をPCで入力していく作業は大変に難しく、集中力の要る作業であったが、利用者の立場からはわからない図書館業務を体験でき、大変に貴重な経験ができたと感じた。
- ・本の修繕作業を通じて、1冊1冊を大切にすることが伝わってきた。同時に、利用者とその気持ちを共有するにはどうすれば良いのかを考えさせられた。
- ・地域の人々（利用者）との信頼関係の構築が重要と痛感した。
- ・地域に密着する図書館作りは息の長い作業で有り、日々の図書館業務と併せて、とても持久力の要ることだと思った。
- ・司書の仕事は思っていた以上に重労働であった。

2014年度の活動の中で学生にもっとも印象に残ったのが、書誌情報入力作業と「明大生のおすすめの本のコーナー」作りであったようである。参加学生の声을それぞれ紹介しておこう。

2年生 匿名

担当した業務の中で難しかったけれどもとてもためになったのが、震災後に図書館に寄贈された本の書誌データを入力することでした。既に決まっているフォーマットに必要な項目を入力する作業です。しかし、一番難しかったのは限られた行数で紹介文を書くことでした。利用者にわかりやすい文章で書くことが求められていましたし、いま自分の目の前にいる来館者やお子さんがいずれこの本を利用すると考えると、余計にプレッシャーを感じてしまいました。しかし、次第に「こんな風に書けば、直ぐにわかるかな」とか「ここはもっとわかりやすくしよう」とか、「あの子にこの文章で魅力が伝わるかな」と文章を考える作業はとても勉強になりましたし、次第に楽しくなりました。

“明大生の奨める図書リスト”について

情報コミュニケーション学部情報コミュニケーション学科

2年1組30番 松下瑠璃

今回のボランティア活動の一環として、私たちは図書館におすすめ本紹介コーナーを作りました。その際、図書館を訪れる人が手に取れるものを用意すれば、残すこともでき、より興味を持ってもらえるのではないかと助言を受け、“明大生の奨める図書リスト”を作成する企画（というほどしっかりしたものではありませんでしたが）が立ち上がりあがりました。

リストを作る以前から、それぞれのおすすめ本を決めるための話し

合いが新地町に行く前（7月）に行われました。まず、1人、1人がどのように本を選ぶか、選書するにあたり一つのテーマを決めて紹介していくか、意見を出し合いました。その結果、テーマを決めるとおすすめできる本が限られてしまうため定めず、幅広い人々に興味を持ってもらえるように年齢層を分担してそれぞれ本を持ち寄ることに決まりました。対象にした年齢層は0歳児、3-6歳児、小学3・4年生、大人となりました。また、リストを作りにあたっては新地町図書館から「事前にネット上で新地町図書館のOPACで蔵書の確認を行って欲しい」というアドバイスをもらい、それぞれが確認の上、リストを作成しました。

私はその中で、安房直子さんの『なくしてしまった魔法の時間』を紹介しました。この本を選んだのは、掲載されているある短編を読んで頂きたかったからです。そのお話は失われたものが見える魔法の指窓のお話で、私自身も大好きな物語です。対象には小学3・4年生を選びましたが、大人の方にも読んで、何かを想ってもらえたらいいなと思いながら、図書リストや紹介ポップを作りました。きっと今回、図書リストと一緒に作った人みんなが同じような気持ちで、それぞれ本を選んだのではないかと思います。

4年生 匿名

明治大学生おすすめの本を紹介させて頂いたことが、非常に思い出深い。利用者にどう伝えれば、興味を持ち読んでくれるかを考えるのが楽しかった。また、選書に際し対象年齢だった頃の自分やなぜこの本を紹介したいのかなど考えることで、自分を見つめ直すいい機会になりました。そして、参加者で作り上げたものが実際に並べられているのを見ると、達成感と嬉しい気持ちでいっぱいだった。

因みに私が推薦した本は、高校生を対象にして、貴志祐介『青の炎』（角川書店、1999年）です。



新地町図書館の入り口に設営された「おすすめ本」のコーナー



1冊1冊に添えられた「おすすめ理由」

終わりに

こうして4年間の活動を振り返ってみると、震災復興支援活動と銘打ちながらもボランティア活動を新地町に「受け入れていただいた」という気持ちが強くなってくる。特に図書館での「支援活動」では司書課程履修学

生にとっては、支援活動というよりも、ある種インターンシップの貴重な機会になっていると思う。そこで今後、この活動が有効に機能するためには、新地町の震災復興支援だけではなく、さらに「地域活性化」につながり、かつ明治大学の司書課程学生にとっての実習の場として、共に有効になっていくことではないかと考えている。

図書館の「素人」である筆者が感想を少しだけ述べておきたい。それは支援活動地における社会状況の深い理解の必要性和地方における図書館が抱える課題の深刻さである。当初、新地町で学習支援活動を図書館で行う際に「児童にいかに来館してもらうか」という課題に直面したことは前述したとおりである。そこから、広報活動の変更などさまざまな工夫を試みた。そして最終的に学習支援を各地区の小学校で行う、いわば「待つ」学習支援から「訪ねる」学習支援への転換し、本報告の写真の変化にいたった。

しかし、この課題の根本には首都圏に居住するわれわれの想像を遙かに上回り地方が「自動車社会」になっていたことを理解していなかったことがあった。公共交通機関が整備されていないことから、保護者などが運転する自動車による移動と本人による自転車以外では児童は図書館に来るすべがない。地方における人口の減少、過疎化という問題から「買い物難民」という社会問題がしばしば報道されているものの、自分で移動手段を有さない児童にとっての「図書館難民」とでも呼べる状況が起きているのではないかと痛感した。もちろん、新地町では既に図書館と各地区の諸施設との間での連携がとれていることは、参加学生の活動から明らかであるが・・・小学生低学年の幼き日に3歳年長の兄に手を引かれて、地域の図書館に歩いて行くことができた自分からは想像もつかない状況であった。

本報告の末筆ではあるが、2014年度に始まった司書課程学生による新地町での活動には、窓口である新地町役場企画振興課職員の方々には言うに及ばず、実際に学生を受け入れてくださった伏見図書館長をはじめ日黒館員など図書館スタッフの皆さんのご協力とご理解がなければ実現しなかったことを強調しておきたい。この点については、筆者の稚拙な言葉よりも、実際に参加した学生の感想を謝辞に替えて、参加者全員の気持ちとして、本報告を締めくくりたい。この文章から学生が図書館の実務、東日本大震災の現場、双方の現実を感じ、理解しようとしたことにも賛辞を送りたい。

学部間共通総合講座での活動が主導のプログラムに加わったこともあり、新地町では現地での状況などわからないことも多かったが、新地の方々は皆優しくしてくれてありがたかった。特に町会議員の吉田議員の震災当日の体験に基づくお話や、伏見館長に図書館で見せていただいたDVD（NHK「証言記録東日本大震災 36 福島県新地町～津波は知っているつもりだった～」）で、被害状況や復興について知ることができたことは、地震・津波を経験したことのない私にとって印象深い経験となった。

図書館では、私たち明治大学生が来るということでわざわざ仕事を作ってくれたり、当日は司書の人たちが優しく説明してくれながら一緒に業務をしたりということで、大変良くしていただいた。伏見館長や担当の目黒さん、一緒に活動していただいた図書館員の皆様には感謝の念が尽きない。受け身で進んでしまったことも多かったのも、もし司書課程学生が今後もこのボランティアに参加できるのならば、もっと積極的にこちらから企画や提案をしていけたらいいと感じた。

ボランティア活動期間を通して、いろいろな方にお世話になった。話しているうちに、一人一人の人間というか背景のようなものを感じた。メディアの向こうから映像だけ見ることは比べものにならないほど、被災、復興を、それを経験した人間がいるのだと生身に感じた。そして、大きな災害から復興する人間の「力」を肌身と感じた。地震・津波という災害はいつでも起こりうるが、私たちはそれを忘れがちであるように思う。自らへの注意喚起という意味でも忘れられない経験となった。
